



2022年7月18日放送

「第73回日本皮膚科学会西部支部学術大会

大会を終えて」

宮崎大学 皮膚科
教授 天野 正宏

はじめに

第73回日本皮膚科学会西部支部学術大会を2021年10月30(土)、31(日)宮崎市コンベンションセンターを会場に開催致しました。新型コロナウイルス感染症(COVID-19)に対して発令された宮崎県独自の「緊急事態宣言」、そして宮崎市に適用された「まん延防止等重点措置」が9月30日をもって解除されたので、感染者の増加が危惧されましたが、予想に反し10月21日から新規感染者が宮崎県では確認されませんでした。この様な状況下で開催された大会は招宴会や懇親会は中止とさせて頂きましたが、感染状況も鑑みてハイブリッド開催とさせて頂きました。

同大会は1982年11月に会長、井上勝平 宮崎大学名誉教授が日本皮膚科学会 第34回西部支部総会・学術大会として初めて宮崎で開催いたしました。その後、2007年10月に会長、瀬戸山充 宮崎大学名誉教授の下に第59回 日本皮膚科学会西部支部学術大会が開催され、今回が14年ぶり3回目の宮崎開催となりました。

テーマ

宮崎大学が掲げているスローガンが「世界を視野に地域から始めよう」であります。本大会ではこのキャッチコピーをお借りして、学会テーマを「世界を視野に地域から始める皮膚科学」と致しました。地域での診療や地域から始



図1 学会ホームページ

まる研究を大切にし、この学会を契機にここ宮崎から世界へ何か発信できたものと考えております。また本大会ホームページの写真と抄録集の表紙絵がとてもインパクトがあるとお褒めのお言葉をいただきました（図1）。私達医局員が宮崎市の南に位置する日南市の公園「サンメッセ日南」で撮影したものです。7体のモアイ像が日南海岸（太平洋）をバックに立ち、その眼が“世界を視野に”凝視している様にも見えます。今回、本大会のロゴマークを自前で作成いたしました（図2）。宮崎県は“日本のひなた”と言われ、それを象徴する太陽、そして有名な観光地である青島、鬼の洗濯板と宮崎県の木であるフェニックスを背景として、中央で神楽が舞います。図2の左側が実際のロゴマークです。右側のロゴマークは会長を前面に出した構成になっておりますが、もちろんこのロゴマークは医局員の反対で即、“ボツ”になりました（笑）。

プログラム

宮崎県シンボルキャラクターである“みやざき犬”は「ひい」くん、「むう」ちゃん、「かあ」くんの3匹がおりますが、学会会場受付ではそのうち2匹がお出迎えをしてくれました（図3、4）。この名前「ひい」、「むう」、「かあ」は宮崎県の旧称、日向（ひゅうが＝ひむか）に因んでいます。

本大会では特別講演を杉本真樹先生（帝京大学）に、医療現場におけるVR（Virtual Reality：仮想現実）/AR（Augmented Reality：拡張現実）の世界についてお話していただきました。VRによる外科手術ナビゲータや人体解剖教育などは、皮膚外科を実践している皮膚科医に、今後、大いに役立つものと考えています。また招待講演では米国マイアミ大学皮膚科のマリア・ミテヴァ准教授に、脱毛症の皮膚病理組織学的な鑑別点を中心にご講演していただきました。シンポジウ



図2 学会のロゴマーク
実際のロゴマーク(左)。会長を前面に出したロゴマークは即、“ボツ”になりました。(右)。



図3 シーガイアコンベンションセンター エントランス



図4 学会会場受付

ムでは、以下、宮崎ならではのテーマを用意致しました。まず「HTLV-1 と ATLL」では森下和広先生（宮崎大）、内丸 薫先生（東京大）、宮城拓也先生（琉球大）、成田幸代先生（宮崎大）の4名の先生方に、ウイルス（HTLV-1）から成人T細胞白血病/リンパ腫（ATLL）への発症機構、そしてATLLやHTLV-1キャリアの皮膚病変までディスカッションして頂きました。宮崎県は高齢化率が30%と全国よりも10年早く高齢化が進行している地域であります。吉村 学先生（宮崎大）、篠田 勸先生（広島市）、檜原進一郎先生（都城市）、根本利恵子先生（宮崎大）に「高齢化社会と地域医療」について大いに語っていただきました。また「動画で学ぶ皮膚悪性腫瘍手術のポイント」では、松下茂人先生（鹿児島医療センター）、持田耕介先生（宮崎大）、内 博史先生（九州がんセンター）、山崎 修先生（岡山大）に、動画を見ながら外科的基本手技をご説明いただき、特に若手の先生方には今後、皮膚外科を目指す契機になればうれしいです。教育講演では宮崎ならではのテーマ「第4の公害病 土呂久慢性砒素中毒症」と題して出盛允啓先生（宮崎市）に、また樹状細胞研究の第一人者である佐藤克明先生（宮崎大）に「皮膚免疫疾患における樹状細胞の関わり」と題して、またがんゲノム医療で活躍されている西原広史先生（慶應大）に「がんゲノム医療の実践：現状の課題と今後の展望」などをテーマにご講演いただきました。

また特別企画として井上勝平先生（宮崎大名誉教授）に、「皮膚病診療ノートの回想」と題してご講演いただきました。宇原 久先生（札幌医大）は信州大学時代に井上先生と交流があることをお聞きして座長をご依頼いたしました（図5）。文化講演では内科医であり僧侶である栗田正弘先生（宮崎県高鍋町）に「医者と僧侶二足のわらじ〜生老病死に直面して思うこと〜」と題してお話しいただきました。伊藤英明主演のTBS金曜ドラマ（2020年1月から午後10時放映）をご覧になられた方がいらっしゃるかもしれませんが、今でこそ医師であり僧侶でもある先生は珍しくなくなってきました。栗田先生はがん末期の父親の看取りや地域医療の重要性などお話し頂きましたが、会場からはすすり泣く声が聞こえて参りました。宮崎皮膚科医会が毎年、「いい皮膚の日」に合わせて皮膚疾患に関するポスターを作成しています。歴代ポスター（平成2年～令和3年）を会場に展示いたしました（図6）。多くの方々が足を止めてポスターに見入っておられました。



図5 演者の井上勝平先生と座長の宇原 久先生



図6 宮崎皮膚科医会作成の歴代ポスター（平成2年～令和3年）

おわりに

2日間の学会で現地参加者が約300名、学会登録者が総勢約1,000名と大盛況の下に第73回日本皮膚科学会西部支部学術大会を閉会いたしました。一般演題には132題もの演題をご応募頂きました。大会会長としてこの場をお借りして深謝申し上げます。大会終了後、参加された多くの先生方から「学会おもしろかったよ」、「学会の成功おめでとう」とお褒めのお言葉をいただきました。宮崎大学皮膚科スタッフ一同、万全な感染症対策を行いながら、心のこもったおもてなしができたと本当に安堵しております。ありがとうございました。